広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	王績小論 ： 王績詩にみえる「野」について
Author(s)	猪井, 敏也
Citation	中國中世文學研究 , 76 : 1 - 13
Issue Date	2023-03-28
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054524
Right	
Relation	

王績小論　―王績詩にみえる「野」について―

猪井敏也

はじめに

王績（五九〇～六四四）―字は無功、東皋子と号す―は隋末唐初を生きた詩人である。彼の伝記は莫逆の友であった呂才の「王無功文集序」に詳しい。

王績の伝記論については高木正一先生『六朝唐詩論考』（創文社　一九九九）や高木重俊先生『初唐文学論』（研文出版　二〇〇五）に詳細な論考が掲載されている。その一方で、王績の作品論―特に語句の用法の特徴など―について述べた先行論文には、『六朝唐詩論考』の「王績の伝記と文学」や『初唐文学論』の「王績の文学」、また「王績『古意六首』考」（加藤文彬『中国文化：教育と研究』71　二〇一三）などが挙げられるが、数としてはやや少ない感がある。

王績は「適」を何よりも重視した人であった。例えば「答程道士書」では、

足下欲使吾適人之適。而吾欲自適其適。

足下　吾をして人の適に適せしめんと欲す。而るに吾は自ら其の適に適せんと欲す。

と他者の「適」を押し付けてくる程道士なる者を批判しながら[1]、

既無忤於物、而有楽於身。故常縦心以自適也。

既に物に忤（みだ）るること無く、而して身に楽しみ有り。故に常に心を縦にして以て自ら適ふなり。

と自身の生活における「適」について述べる。また王績は「答処士馮子華書」の中で「適意」と「会意」について次のように述べている。

適意為楽、雅会吾意。

意に適ひて楽しみを為すは、雅（つね）に吾が意に会（かな）へり。

題歌賦詩、以会意為功。不必与夫悠悠閑人相唱和也。

歌を題し詩を賦するは、会意を以て功と為す。必ずしも夫の悠悠たる閑人と相唱和せざるなり。

右の「会意」は当時の宮廷文壇に向けられた批判であり、故郷龍門で隠棲する己の創作態度・意識を表明したものになっている。

王績にとってこうした「適意」や「会意」がその生活のみならず、創作活動においても重要なウエイトを占めていたことが想像される。

また、そうした王績の生き方に多大な影響を与えた人物として阮籍と陶淵明の二人が挙げられる。この二人は指標とすべき隠者のモデルとしてしばしば作中に登場するが、彼らの作品に対して直接言及したものは多くない[2]。

王績は龍門で隠遁生活を営んだが、ありふれた隠者の日常生活を様々に描く中で「野」字をしばしば使用しており、その用い方には王績独自のものと思われる用例があった。

そこで、本論文では王績がその作中で用いた「野」について若干の考察を加え、その用法の特徴や新しさに迫ることを目的としたい。それが王績研究において新たな視座を提示できると考えたからである。

一

先行研究において既に指摘されている通り[3]、王績は好んで「野」を用いているが、その用例を全て挙げると次のようになる。なお使用したテキストは『五巻本会校王無功文集』（韓理洲校点　上海古籍出版社　一九八七）である。

【詩】　十七例

A 野楼全跨迥　山閣半臨煙　（春日山荘言志）
B 野心長寂寞　山逕本幽迴　（題黄頗山壁）
C 野婦調中饋　山朋促上樽　（春荘走筆）
D 野客元図静　田家本悪諠　（春荘走筆）
E 野杯浮鄭酌　山酒漉陶巾　（嘗春酒）
F 野館含煙冷　山衣犯雪寒　（冬夜載酒於郷館尋崔使君善為）
G 野膳調藜荏　山衣緝薜蘿　（過鄭処士山荘其一）
H 結衣尋野路　負杖入山門　（過山観尋蘇道士不見題壁其三）
I 胡麻山麰様　楚豆野麋方　（食後）
J 山精愁鏡厭　野魅怯燈然　（病後醮宅）
K 野人迷節候　端坐隔塵埃　（九月九日贈崔使君善為）
L 巖居何啻好　野性本規閑　（山家夏日九首其四）
M 野竹欄階種　巖花入戸飛　（山家夏日九首其五）
N 野妻臨甕倚　村豎捧瓶来　（春荘酒後）
O 野情貪薬餌　郊居倦蓬蓽　（採薬）
P 山鶏終失望　野鹿暫辞群　（被挙応徴別郷中故人）
Q 空城寒日晩　平野暮雲黄　（過漢古城　※補遺）

【賦】　四例

R野亭鶴唳、山梁雉鷕。　（遊北山賦）
S野餐二簋、園蔬一盤。　（遊北山賦）
T翠幕臨池灞池曲、朱帷曜野横橋道。　（三月三日賦）
U塵半湿而街静、気全収而野華。　（三月三日賦）

【文】　四例

V度情振理、探幽洞微、誠非野人所敢酬析。　（重答杜使君書）
W親党之際、皆以山麋野鹿相畜。　（答処士馮子華書）
X賢人充其朝、農夫満於野。　（答処士馮子華書）
Y棄而散諸野、終年肥遯。　（無心子）

すべてで二十五例を数えるが、筆者が注目したいのは例えばK「九月九日贈崔使君善為」詩にみえる「野人」のように、「野」を人の性質や属性を表すために使ったものである。それを基準にして整理を加えると、次の八例にしぼられる。

B野心長寂寞　山逕本幽迴　（題黄頻山壁）
D野客元図静　田家本悪諠　（春荘走筆）
K野人迷節候　端坐隔塵埃　（九月九日贈崔使君善為）
L巌居何啻好　野性本規閑　（山家夏日其四）
O野情貪薬餌　郊居倦蓬蓽　（採薬）
P山鶏終失望　野鹿暫辞群　（被挙応徴別郷中故人）
V度情振理、探幽洞微、誠非野人所敢酬析。　（重答杜使君書）
W親党之際、皆以山麋野鹿相畜。　（答処士馮子華書）

P「被挙応徴別郷中故人」詩の「山鶏」と「野鹿」はともに徴に応じて故郷を離れる王績自身を喩え、W「答処士馮子華書」の「親党之際、皆以山麋野鹿相畜」は「気心知れた仲間の付き合いでは、皆が私のことを山野の鹿としてみなしている」と、「野人」と同じく己、即ち人の性質や属性を表したものである。

二

王績の「野人」に検討を加える前に、王績以前の作品中にみえる「野人」について概観してみたい。『文選』中にみえる「野人」の用例には次の三つがある。

a僕野人也。　（潘岳「秋興賦」序）
b野人有快炙背、而美芹子者。（嵇康「与山巨源絶交書」）
c置之虚室、人野何弁。　（任昉「斉竟陵文宣王行状」）

a潘岳「秋興賦」序の李善注は『礼記』玉藻の「凡尊必上玄酒、唯君面尊。唯饗野人皆酒。大夫側尊用梂、士側尊用禁。」を引くが、この「野人」は身分の低い者・田舎者を指す。「秋興賦」において「野人」に込められた潘岳のおもいは複雑なものがあっただろうが、「農夫田父」に等しい教養のない田舎者、と自身を卑下する謙辞だと捉えておく。

次にb嵇康「与山巨源絶交書」では「野人有快炙背、而美芹子者。欲献之至尊、雖有区区之意、亦已疏矣。願足下勿似之」とあり、その李善注は「『列子』曰、『宋国有田父』。」と『列子』楊朱のエピソードを引く。李善は嵇康の「野人」が『列子』の「田父」に基づくと解したのであるが、李善が引用した箇所のすぐ前に「故野人之所安、野人之所美、謂天下無過者。昔者宋国有田夫。」とあるのに拠るだろう。

最後にc任昉「斉竟陵文宣王行状」は「野人」ではないが、人の性質を「野」で形容した例として挙げた。李善注は『孟子』尽心の「舜之居深山之中、与木石居、与鹿豕遊。其所以異於深山之野人者、幾希。」と殷仲文「入剡詩」の「野人雖云隔、超悟必有比」を引いている。

aからcまでの三例は全て「身分の低い人」「田舎者」という意味で使われていると判断してよいだろう。

三

次に『文選』に採録されていない詩にみえる「野人」について検討を加えたい。『先秦漢魏晋南北朝詩』（逯欽立輯校　中華書局　一九八三）からは次の六例を見出すことができた。

A野人雖云隔　超悟必有比　（晋・殷仲文「入剡詩」）
B豈但避霜雪　当儆野人機　（宋・鮑照「詠双燕詩」）
C心存野人趣　貴使容吾膝　（梁・周捨「還田舎」）
D泛酌宜長久　聊薦野人誠　（梁・王筠「摘園菊贈謝僕射挙」）
E野人相就飲　山鳥一群驚　（北周・庾信「奉答賜酒」）
F雖無亭長識　終見野人伝　（北周・庾信「奉和趙王隠士」）

Aは先述した任昉「斉竟陵文宣王行状」の「置之虚室、人野何弁」の李善注にも引かれていた。この二句しか伝わらず、詳細はわからない。Bは宋の鮑照の作だが、この「野人」は燕を捕まえようと罠を張る者であり、燕に危害を加える存在である。

Cの周捨とDの王筠、そしてEとFの庾信の四例を詳しく見てみる。まず周捨「還田舎」詩は次の通り。

1薄遊久已倦　薄遊　久しく已に倦み
2帰来多暇日　帰来　暇日多し
3未鑿武陵巌　未だ武陵の巌を鑿(ひら)かず
4先開仲長室　先に仲長の室を開く
5松篁日月長　松篁　日月に長く
6蓬麻歳時密　蓬麻　歳時に密なり
7心存野人趣　心に野人の趣を存し
8貴使容吾膝　吾が膝を容れしむるを貴しとなす
9況茲薄暮情　況や茲に薄暮の情
10高秋正蕭瑟　高秋　正に蕭瑟たるをや

三句目「武陵巌」は陶淵明「桃花源記」の、

晋太元中、武陵人捕魚為業。……〈中略〉……林尽水源、便得一山。山有小口、髣髴若有光。

晋の太元中、武陵の人魚を捕へるを業と為す。……〈中略〉……林　水源に尽き、便ち一山を得たり。山に小口有り、髣髴として光有るがごとし。

を踏まえ、四句目「仲長室」は『後漢書』仲長統伝に

使居有良田広宅、背山臨流、溝池環市、竹林周布、場圃築前、果園樹後。

居をして良田広宅有らしめ、山を背にして流れに臨み、溝池市環し、竹林周く布き、場圃前に築き、果園後に樹ふ。

とあるのに拠る。七句目の「心存野人趣」は「私の心の中には野人としての興趣がある」ということ、八句目「貴使容吾膝」は陶淵明「帰去来辞」の「倚南窓以寄傲、審容膝之易安」を踏まえての表現である。ここにみえる「野人」とは世を避けて暮らす隠者のことであろう。隠者としての興趣を胸に抱く周捨は淵明が「帰去来辞」で述べたごとく、狭い我が家での寛ぎを何よりも大切にする自身の姿を描いている。

次に王筠「摘園菊贈謝僕射挙」詩の全文を引いてみよう。

1霊茅挺三脊　霊茅　三脊に挺し
2神芝曜九明　神芝　九明に曜く
3菊花偏可憙　菊花　偏に憙ぶべし
4碧葉媚金英　碧葉　金英に媚ぶ
5重九惟嘉節　重九　惟だ嘉節
6抱一応元貞　抱一　元貞に応ず
7泛酌宜長久　酌を泛めば宜しく長久なるべし
8聊薦野人誠　聊か薦む　野人の誠

八句目にある「野人誠」とは酒に込められた野人の真心、ということであろう。重九の嘉節に酒を酌んで薦めるこのスタイルは陶淵明の姿を連想させる。

王筠と周捨、どちらの「野人」も作者が己自身を形容するのに用いており、隠者を指して「野人」と表現している。そしてこの「野人」は同時に陶淵明の姿とも重なると考えられる[4]。

次に庾信の二例を挙げる。まず「奉答賜酒」詩からみてみる。

1仙童下赤城　仙童　赤城に下り
2仙酒餉王平　仙酒　王平に餉らる
3野人相就飲　野人　相就きて飲み

4山鳥一群驚　山鳥　一群驚く
5細雪翻沙下　細雪は沙を翻して下り
6寒風戦鼓鳴　寒風は戦鼓のごとく鳴る
7此時逢一酔　此の時　一酔に逢ふ
8応枯反更栄　応に枯るべくして　反って更に栄ゆるなるべし

三句目「野人相就飲」について、森野繁夫先生はその『庾子山詩集』（白帝社　二〇〇六）の中で、

「野人」は作者のことであろう。その「小園賦」に「余有数畝蔽廬、寂寞人外。～名為野人之家、是謂愚公之谷」（余に数畝の蔽廬有り、寂寞として人外にあり。～名づけて野人の家と為し、是れ愚公の谷と謂ふ）とある。

と述べておられる。次に「奉和趙王隠士」詩は一部のみを引用する。

11澗険無平石　澗は険しくして平石無く
12山深足細泉　山は深くして細泉足る
13短松猶百尺　短き松すら猶ほ百尺
14少鶴已千年　少き鶴も　已に千年
15野鳥繁弦囀　野鳥は繁弦のごとく囀り
16山花焔火然　山花は焔火のごとく然ゆ
17洞風吹戸裏　洞風は戸裏に吹き
18石乳滴窓前　石乳は窓前に滴る
19雖無亭長識　亭長の識る無しと雖も
20終見野人伝　終には野人として伝へられん

こちら「野人」についても、森野繁夫先生は『庾子山詩集』の中で次のように述べておられる。

結びの二句では、以上八句で述べたような所に住んでおれば、たとえ亭長に其の名を知られなくても、ついには野人として名が伝えられるに違いない、と詠う。

「終見野人伝」の「野人伝」とは『後漢書』逸民列伝に、

我野人耳、不達斯語。請問天下乱而立天子邪。理而立天子邪。立天子以父天下邪。役天下以奉天子邪。昔聖王宰世、茅茨采椽、而万人以寧。今子之君、労人自縦、逸遊無忌。吾為子羞之、子何忍欲人観之乎。

我野人のみ、斯の語に達せず。請ひ問ふ、天下乱れて天子立つるか。理まりて天子立つるか。天子を立てて以て父たらしむるか。天下を役して以て天子を奉ずるか。昔聖王世を宰むるに、茅茨采椽、而して万人以て寧んず。今子の君、人を労して自ら

縦にし、逸遊して忌むこと無し。吾子の為に之を羞づ、子何ぞ忍んで人をして之を観しめんと欲するか。

とある「漢濱老父」のエピソードを指す。

さて、ここまで「野人」の用例を六つ挙げて検討してみたが、A殷仲文とB鮑照の詩に見えた「野人」は『文選』の三例と同じく、「身分の低い者」「田舎者」また「粗野な者」という意味合いで使われていると考えられそうだ。

この二例とは異なり、C周捨、D王筠、E・F庾信に見られた「野人」は隠者としてのイメージを含む。周舎と王筠の「野人」には陶淵明の姿が重ねられているようにみえるが、「野人」を隠者と同等の意味を持つ語として詩の中で使い、そこに淵明の姿を重ねるようになったのは梁代に始まるとみてよいだろう。

また庾信はその「小園賦」の中で次のように述べている。

一寸二寸之魚、三竿両竿之竹。雲気蔭於叢蓍、金精養於秋菊。棗酸梨酢、桃虎李薁。落葉半牀、狂花満屋。名為野人之家、是謂愚公之谷。試偃息於茂林、乃羨於抽簪。

自らが造営した小園を「野人之家」と名づけているが、この「野人」とは庾信自身を指す。そして「野人之家」は同時に「愚公之谷」でもある、と庾信は言う。倪注では『説苑』政理篇を引きながら「言其如隠士之居也」と結び、「愚公之谷」は隠者の居処でもあると解釈している。

「秋興賦」序にて潘岳が「僕野人也」と表現したのは、「身分の低い者」「田舎者」という意味を含ませた謙辞の一種だった。やがて梁代になるとそこに隠者のイメージが付与され、そこはかとなく陶淵明を連想させるような表現も登場するようになったと考えられる。

四

先に見た通り、王績の作中には「野人」が二例あった。

K野人迷節候　端坐隔塵埃　（九月九日贈崔使君善為）

V度情振理、探幽洞微、誠非野人所敢酬析。（重答杜使君書）

「九月九日贈崔使君善為」詩から検討を加える。

1野人迷節候　野人　節候に迷ひ
2端坐隔塵埃　端座して塵埃を隔つ
3忽見黄花吐　忽ち黄花の吐くを見て
4方知素序迴　方に素序の迴るを知る
5映巌千段発　巌に映じて千段発き
6臨浦万株開　浦に臨んで万株開く
7香気徒盈把　香気　徒らに把に盈つ

8無人送酒来　人の酒を送りて来たる無し

この崔善為との交流については、杜之松とともに「王無功文集序」に次のような記載がある。

貞観中、京兆杜之松、清河崔公善継為本州刺史、皆請与君相見[5]。君曰、奈何悉欲坐召厳君平耶。竟不見。崔、杜高君調趣、卒不敢屈。歳時贈以美酒、鹿脯、詩書往来不絶。

貞観中、京兆の杜之松、清河の崔公善継ぎて本州刺史と為り、皆　君と相見んことを請ふ。君曰く、奈何ぞ悉く坐して厳君平を召さんと欲するかと。竟に見えず。崔、杜　君の調趣を高しとし、卒に敢えて屈せず。歳時には贈るに美酒、鹿脯を以てし、詩書の往来絶えず。

一句目の「野人」とは王績自身のこと。二句目に「端坐隔塵埃」とあるように、「野人」は世俗を離れた隠士を表す語として用いられている。そしてその「野人」である王績が愛でるものは菊であり、先に挙げた周捨や王筠の流れを汲む表現といえる。

七・八句目「香気徒盈把、無人送酒来」は『芸文類聚』巻四・九月九日に引く「『続晋陽秋』曰、『陶潛嘗九月九日無酒、宅辺菊叢中、摘菊盈把。坐其側久、望見白衣至。乃王弘送酒也。即便就酌酔而後帰』。」や『宋書』隠逸伝・陶潛伝の「嘗九月九日無酒。出宅辺菊叢中坐久、値弘送酒至、即便就酌、酔而後帰。」を踏まえたものだが、これについて高木正一先生は『六朝唐詩論考』「王績の伝記と文学」の中で、

王弘になぞらえた崔善為に送酒を請う詩であるが、おのれはまた、淵明その人になりきったつもりで、古典的な雰囲気にひたっているのである。

と述べておられる。

では次にVの「重答杜使君書」にみえる「野人」について、前後を少し合わせて引用してみる。

月日。佐史楊方至。奉報書、兼枉別帖、垂問家礼喪服新義五道。度情振理、探幽洞微、誠非野人所敢酬析。但先人遺旨、頗会恭習。

月日。佐史楊方至る。報書を奉じ、兼ぬるに別帖を枉げ、家礼喪服新義五道を垂問す。情を度り理を振へ、幽を探り微に洞ること、誠に野人の敢えて酬析する所に非ざるなり。但だ先人の旨を遺すのみ。頗る恭んで習ふに会ふ。

刺史の杜之松が楊方なる者を遣わし、王績に「家礼・喪服新義」について質問してきたことがあった。これに対して王績は、「野人」である私がわざわざ詳しく解説す

ることもない、と答えている。ここの「野人」は謙辞として用いられているが、そこに陶淵明の姿を重ねているともいえそうだ。

杜之松とのやり取りは複数回あったと見受けられるが、「重答杜使君書」以前の書簡「答刺史杜之松書」の中で王績は次のように述べている。

兄弟以俗外相期、郷閭以狂生見待。歌去来之作、不覚情親、詠招隠之詩、唯憂句尽。帷天席地、友月交風。新年則柏葉為樽、仲秋則菊花盈把。

兄弟　俗外を以て相期し、郷閭　狂生を以て待せらる。去来の作を歌へば、情の親きを覚えず、招隠の詩を詠へば、唯だ句の尽くるを憂ふのみ。天を帳とし地を席とし、月を友とし風と交はる。新年には則ち柏葉を樽と為し、仲秋には則ち菊花把に盈つ。

「去来之作」は陶淵明の「帰去来兮辞」であり、「菊花盈把」は先に引用した王弘が酒を送ってきたエピソードを想起させる。これに対する杜之松からの返事も残っている。

敬想結廬人境、植杖山阿。林壑地之所豊、烟霞性之適所。蔭丹桂、藉白茅、濁酒一杯、清琴数弄、誠足楽也。此真高士、何謂狂生。

敬ひて廬を人境に結び、杖を山阿に植くを想ふ。林壑は地の豊かなる所、烟霞は性の適する所。丹桂を蔭とし、白茅を藉き、濁酒一杯、清琴数弄し、誠に楽しむに足るなり。此れ真の高士、何ぞ狂生と謂はんや。

「結廬人境」は明らかに陶淵明の「飲酒」其五を踏まえたものであり、杜之松は王績に陶淵明の姿を重ねて対応していることがわかる。

このように、崔善為、杜之松らとの間に為されたやりとりの中で、王績は「淵明その人になりきったつもり」でいただろうし、二人の刺史もそれを認め、遊戯的な色彩のある交流を続けていたといえる[6]。

王績の「野人」は以上の二例だが、他にDの「春荘走筆」に見えた「野客」がある。詩の一部を引用すると、

1野客元図静　野客　元より静を図り
2田家本悪諠　田家　本より諠を悪む
3枕山通箘閣　山に枕して箘閣に通じ
4臨磵創茅軒　磵に臨んで茅軒を創る
5約略栽新柳　約略　新柳を栽え
6随宜作小園　随宜　小園を作る
7草依三径合　草は三径に依りて合し
8花接四鄰繁　花は四隣に接して繁し

『王績文集』（夏連保校注　三晋出版社　二〇一六）では「野客」に注して「山野之客也。此処作者自喩。」とあり、王績自身のことを指すと解釈する。この語については王績以前の用例は見当たらなかった。

「野人」や「野客」にみえる通り、王績は「野」に世俗を離れた隠者の意味を含ませて用いているが、そうした「野」はまた己自身の心の有様を表すのにも用いられている。

B野心長寂寞　山逕本幽迴　（題黄頻山壁）
L巌居何啻好　野性本規閑　（山家夏日九首其四）
O野情貪薬餌　郊居倦蓬蓽　（採薬）

Bの「野心」については『王績詩文集校注』（金栄華　新文豊出版公司　一九九八）の注に「閑散不羈之心」とあり、『王績文集』の注においても同様の解釈をしている。

「野心」の用例を『文選』に当たってみると、

唯北狄野心、掘強沙塞之間。　（丘遲「与陳伯之書」）
而操豺狼野心、潛包禍謀。　（陳琳「為袁紹檄豫州」）

二例を見つけることができたが、それぞれ獣のような心、獰猛な心という意味であり、王績の「野心」とは意味の上で異なる。王績の用いた「野心」は従来の語に王績独自の解釈を加えたものかもしれない。

Lの「山家夏日」詩では自身の性質を「野性」と表現しており、『王績詩文集校注』では「郷野不宜仕宦之個性」と注されている。この「野性本規閑」は閑静を旨とする点において前掲「野客元図静」と非常によく似た表現だといえよう。なお、この語も「野客」同様、王績以前の用例は見当たらなかった。

Oの「野情」については先行研究に指摘があり[7]、また『王績詩文集校注』『王績文集』はともに「愛好山野之心」と注してある。

なお、この「野情」に関しては庾信の「奉和永豊殿下言志」其十に用例が一つだけ確認できた。

野情風月曠　野情　風月　曠く
山心人事疏　山心　人事　疏なり

森野繁夫先生はこの「野情」について『庾子山詩集』の中で、

「野情は野に住む者（自分）の思い」
「山心は、山中に棲んでいる者（自分）の心」

と解釈されておられる。「野情」とは、雄大な自然に包まれ、世俗から遠ざかる心境を表現した言葉であろう。「山心人事疏」は人事の煩わしさを感じさせない、一つの静寂を詠っていると考えられる。

「野人」「野客」は山野を好む隠者を表し、「野心」「野性」

「野情」の「野」は閑静を愛する隠者の性質そのものを表現する手段として機能している。そして「野性」「野心」は王績の独自解釈を含む、彼の考案した新たな表現の一つとして数えられそうだ。また「野情」については庾信以前の詩にその用例を見つけることはできなかった。

五

王績はその作中で「野」を好んで使用しており、本稿冒頭に二十五例を列挙した。これまでに述べた「野」は人の性質や属性を表すものだったが、それ以外の「野」を含む表現についていえることは、質素・粗末なものという意味を加える「野」が多くある中で、王績以前の詩には確認のできない「野」の用法がみられることである。

C 野婦調中饋　山朋促上樽　（春荘走筆）
N 野妻臨甕倚　村豎捧瓶来　（春荘酒後）

C「野婦」について『王績詩文集校注』では「王績於首句自称山野之人、此謂其妻。」とあり、それは『王績文集』においても同様である。D「野妻」についてはどちらも注を施していないが、C「野婦」同様、「野人」である王績の妻という解釈で差し支えないだろう[8]。「山朋」は山野を愛好する友人、「村豎」は村の子どもたちだが、都会の喧噪を離れた侘び住まいの中で、気心知れた友人や家族と過ごす場面を描くのに一役買っている。

おわりに

王績は「野」によって自身の個性を表現した。その源にあるのは梁代に始まる「野」と陶淵明を重ねた表現だといえる。王績は「野人」としての己の日常生活を描き、また己の価値観を述べるため、淵明を連想させる菊やそのエピソードなどを配置してみせた。また「野客」「野性」は王績以前の作にはみえず、「野心」についても王績と同様の意味で使われた例はみえなかったことから、王績は自身の個性や自身の存在を表現する手段として「野」を重視し、「野」に新たな価値を付与したと考えられる。

ここで一つの可能性を提示してみたい。それは「野人」「野情」の用法を手掛かりとして王績に対する庾信の直接の影響を見て取ることができるのではないかということである。「はじめに」で取り上げた呂才『王無功文集序』では王績の多才ぶりを示すエピソードが多く述べられているが、そこで注目したいのは当時の文壇の長老でもあった薛道衡に自作の賦「登龍門憶禹賦」を見せたところ、「今之庾信也」と激賞されたというものである。しかし、残念ながらこの「登龍門憶禹賦」は既に失われており、現在目にすることはできない。

先行研究によると、王績がこの賦を薛道衡に見せたのは十五歳以前のことであり、現存する王績の賦には五言句や七言句の詩句の多用、反復的技巧を用いるなどの特徴が見られ、梁の宮廷文学の流れを汲むとの指摘がある

[9]。現存する王績の賦は全部で四作あるが、このうち「三月三日賦」は彼が十九歳頃の作であり、貴権による推輓を期待したいわゆる就職活動の為の賦であった。

筆者が考えているのは、王績は幼い頃から庾信の作品を学んでいたのではないか、ということだ。それは当時の宮廷における流行を意識した就職活動としての意味合いを強く持つ。その過程で、王績が庾信の作品群から大きな影響を受けた可能性は十分に考えられる。

本論文では王績の「野」に注目し、その独自性について幾許かの考察を試みた。その中で浮かび上がったのが庾信との関連性だが、「野人」「野情」の用法を指摘するだけではこの可能性について論じ切ることはできない。そこで今後は王績と庾信の詩語の類似点について考察し、筆者が提起した王績と庾信の関連性についてより具体的に論じたいと考えている。

注

[1]『初唐文学論』（高木重俊　研文出版　二〇〇五）第一節「王績伝論」の6「盛世に疎外された隠者」参照。

[2]「答処士馮子華書」中にみえる「陶生云、富貴非吾願、帝郷不可期。」などはその少ない好例といえる。

[3]『中国神仙詩の研究』（金秀雄　及古書院　二〇〇八）第四章「初唐の神仙詩（其の一）―王績と盧照鄰」に「冒頭に挙げた『野情』の『野』とは、王績が好んで用いる語で、ここでは山野のこと。『野情』とは、そこへ帰った時得られる感興に他ならない。」とあり、その注に「王績は、『野』という語を好んで用いる。『黄頰山』、『野心長寂寞、山逕本幽迴』。『九月九日贈崔使君善為』、『野人迷節候、端坐隔塵埃』、『嘗春酒』、『野觴浮鄭酌、山酒漉陶巾』」とある。

[4]陶淵明＝「野人」とする先行論文に「元稹の詩に見える『野人』」（長谷川真史　『九州中国学会報』54　二〇一六）があるが、その中で「このように、元稹は隠逸を志向する『野人』の理想像を陶淵明に求めていたと考えられる。そして、理想像としての『野人』陶淵明は元稹の文学的思想のみならず、生活様式や審美的な価値観にも大きな影響を与えている。」と述べられている。

[5]『王績文集』（夏連保校注　三晋出版社　二〇一六）に、「又王績集中有与崔善為往来詩文、崔善為貞観中曾為泰州刺史。而王績所隠居之龍門曾於武徳二年至貞観十七年間隷泰州。故此所謂崔公善者、亦必為崔公善為之誤無疑。」とある。

[6]注[1]前掲書第一節「王績伝論」の6「盛世に疎外された隠者」参照。

[7]注3を参照。

[8]このことについては「论王绩的婚姻诗」（王辉斌　南阳师范学院学报　二〇〇九）に詳細な論考がある。「其一是『野』性鮮明、『野』趣盎然。这是王绩婚姻诗有别于唐代其他诗人同类之作的一个最为明显的特点。这一特点的形成、与王绩『性本爱丘山』（陶渊明诗句）的隐居生活特性、以及其喜欢在诗中自称『野人』・『逸人』・『野客』・『山人』之雅好、乃是关系甚为密切的。这其实是王绩『野性』（王绩有『野性本规闲』

的诗句、见《山家夏日九首》其四）性格的一种具体表现。正是因为王绩有着这样的一种表现、或者说王绩有喜『野』与爱『野』之嗜好的缘故、才导致了他在婚姻诗中、经常性地对其妻子以『野妻』・『野妇』进行戏称。由于这两种『野』的存在、而使得王绩的婚姻诗充满了『野』性・『野』味与『野』趣、从而增强了作品的生活气息、并给人以强烈的审美感受。」

[9]注[1]前掲書第一節「王績伝論」の2「王氏の伝統と王績の少年期」参照。